Ｎｏ．３１３【２０１８年７月６日配信】
館内展示「ふるさとを想ふ　戦地を想ふ」のご紹介（担当：工藤）

こんにちは！　室長の工藤です。

アジア太平洋戦争末期の昭和 20 年 7 月 28 日、当時東京から青森にいる親戚のもとに疎開していた男の子が、青森大空襲に遭遇しました。彼の通っていた国民学校は罹災したため、その後は別の学校に通うことになったそうです。そして学校の近くには缶詰工場があったとか…。

空襲から間もなく 73 年目の「その日」を迎える一昨日、かつての少年はご自身の記憶とわずかな手がかりをもとに、当時の青森を再確認すべく来訪されました。学校、缶詰工場は突き止めることができました。親戚のお家も当時の地図と持参された戸籍に記された住所からおおむね場所を特定できたのですが、かつての少年の記憶とは一致しないようでした。どちらが正しいのかは分かりません。何せ 70 年以上も前のことなのですから。

この少年のみならず、「戦争の時代」の記憶は時間とともに失われていくのです。しかし、大きな戦災を蒙った青森市にとって、「市民の記憶」としてこれを伝え残していくことは大切なことだと思っています。そうしたことから、歴史資料室では、毎年この時期に「平和」をテーマとした資料展示を行っています。今年は「ふるさとを想ふ　戦地を想ふ」と題し、ふるさとを離れた若い兵士たちへの「慰問」に関する資料と、小学校時代の恩師へ宛てた戦地からの「手紙・はがき」でもって構成しました。

「慰問」については、昨年度に慰問団を素材としたテレビドラマがあったようなので、イメージはしやすいのではないかと思います。ここでは、当時油川青年団長を務めた柿崎酉松氏が、県代表郷土部隊慰問団の一員として中国大陸に渡った際に集めた資料を中心に展示しています。また、ふるさとと戦地との間の唯一のコミュニケーションの手段となっていた「手紙・はがき」は、橋本小学校などで教鞭を執られ、その後長島小学校で校長となった加藤壽綿（としつら）氏に宛てられたものを紹介しています。いずれも、今回が初めての公開となります。

こうした「戦争の時代」の資料を通じて、この時代が刻んだ「記憶」を共有し、さらには「平和」について考えていただけたらと思っています。なお、展示は 8 月 25 日までとなっております。

「ふるさとを想ふ　戦地を想ふ」
ポスター